



国境を超えた人材育成

アジアから来た17人が福島で、放射線サーベイを研修

雑草が背丈ほどの高さまで生い茂る休耕田(写真1)。あらかじめ草刈りされた一角に、ブローケン・イングリッシュが飛び交う。頭にスカーフを巻いた女性。静寂の中に響くサーベイメーターの電子音。JAEA 原子力人材育成センターの職員8名が手分けして指示を出す……。

ここは福島県の沿岸部に位置する檜葉町。福島第一原子力発電所から



は南に約 15km。昨年 8 月までは警戒区域として立入りが制限されていた地域だ。今日は土地所有者のご厚意で、ある実習が行われている（写真 2）。

原子力の研究開発や利用の拡大が進むアジア諸国から原子力関係者を受け入れ、原子力安全等の研修を行って、母国で技術指導や研修指導を行う講師を育成する事業が、文部科学省からの委託で毎年行われている。今回研修を受けているのはマレーシア、ベトナム、インドネシア、タイなど 8 か国からなる 17 名で、7 月 11 日から約 40 日間に渡って様々な研修プログラムが組まれている。（写真 3）

今日はこれまでの座学とは違い、現場に出での「福島県における放射線サーベイ」実習。“Fukushima”入りということもあってか、移動するバスの車内には緊張した空気が漂う。現地に着き、民家のすぐ側に仮置場があるのを目の当たりにし、さらに今ここに住んでいる人はいないと聞くと、皆沈痛な面持ちとなった。しかし、いざ現場実習が始まると、4 班に分かれた研修生たちはそれぞれの役割をキビキビとこなしはじめ、次第に生き生きとした研究者の表情に変わってきた（冒頭写真）。



2



3



4

実習内容は大きく分けて環境放射能モニタリングと原子力/放射線緊急時対応の2つで、どちらも基本的にモニタリングとサンプリングを行う。NaIシンチレーションサーベイメータを様々な地点にかざして放射線量を記録する者、また緊急時対応としてホットスポットを探す者など、真剣な目で数値を見つめる姿が印象的だった（写真4）。



一方では、土壌のサンプリング。透明なアクリルの容器に、深さ方向の状況を維持したまま慎重に土壌が移される。草や水なども手際よくサンプリングされ、丁寧にラベルが貼られていく（写真5）。異なる国、異なる言語の壁を超えて協力し合い、ほぼ予定通りに作業は完了した（写真6）。



研修生のひとは「研修を通じて、若干の汚染は残っていたが福島は危険な状態ではないことを確認できた。」と福島の影響を語った。

今回の研修は檜葉町より多大なご協力をいただいた。放射線対策課の猪狩伸之課長補佐からは、原子力安全に関する人材育成に今後も前向きにご協力いただける旨ご挨拶をいただいた（写真7）。今回の人材育成を担当した原子力機構の職員は原子力を専門とする研究開発機関の一員として、これらのご厚意に応えるべく、アジア全体の原子力安全文化を支える人材を育成していく決意を新たにされた。

